

# 『今も16万人が避難する 福島あの瞬間(とき)』(2011.3.11)



二本松市の仮設住宅では、いまだに多くの人びとが避難生活を送っている

福島中央テレビ (FCT)

報道制作局長 佐藤 崇

題字

中川 順

みん  
な  
の  
こ  
ろ  
う  
民  
放  
史

大津波の被害は甚大だった。「相馬市沿岸部が壊滅状態」などの第



FCTニュースセンター(3月14日)

3月11日、最大震度6強の揺れに、夕方のニュース情報番組を1時間後に控えたニュースセンターでは、棚の取材テープや机の資料が床に散乱し、キー局との連絡手段を確保しようと電話にしがみついたデスク以外ほぼ全員が屋外に退避した。社屋至るところで亀裂が入った。電気は瞬間停電だけで確保され、ニュースセンター機能も維持されたが、スタジオは復旧の見通しが立たなかった。福島、いわきなどの支社から映像を伝送する手段は失われ、原稿も携帯電話のメールに頼らざるをえなくなった。

一報が午後4時すぎから入り、深夜になって、内陸部でも人造湖が決壊して集落ごと流されたとの情報が入ってきたが、交通網が遮断されてクルーが近づけない上、近づけても通信網の輻輳のために情報は届かなかった。年に数回、災害報道訓練をしてきたが、これほど何もかもが失われたことを想定した訓練など一度もなかった。

原発は自動停止したが：

県内で震度3以上の地震が発生したら、何を措いても最初に第一、第二の原発の運転状況を確認する、報道部の記者たちはそう叩き込まれていた。しかし、電話が通じず状況がまったく把握できなかった。地震発生8分後、ローカルカットインした。ヘルメットをかぶった徳光雅英チーフアナウンサーが、大津波警報と到達予想時刻、予想される大きさを繰り返し、高台に避難するよう呼び掛けた。その間も頻繁に余震が襲う。

午後3時10分を過ぎた頃、『原発は自動停止した』と連絡が入った。原子力防災の基本は『止める、冷やす、閉じ込める』。その第一段

階できちんとできたなら大丈夫だ、ニュースセンターの誰もそう信じ、『福島第一原発の3基は自動停止、ほかの3基は定期点検中』と伝えた。

それが暗転したのは七時過ぎ、政府が原子力緊急事態を宣言した。その後、福島県が第一原発から半径2キロ以内の住民に避難指示を出したこと、次いで、燃料棒が露出している恐れがあることを速報した。津波で電源が失われ、第二段階の『冷やす』ができなくなっていたのだ。

### 住民と取材クルーの緊張の一夜

デスクたちは、いわき支社の駐在クルーを沿岸に向かわせるとともに、壊滅的な被害との情報が入った相馬市へ向けて2クルーを、第一原発のある双葉町へ1クルーを出していた。また、夕方の番組のために会津地方のスキー場でスタンバイしていたSNG車を百キロ離れたいわき市に向かわせた。道路は至るところで陥没し通行止めになっていたが、それぞれが東に向かった。

本社クルーは夜8時過ぎ、この



東京電力福島第一原発を襲う大津波

時点ではまだ原発ではなく津波から逃れてきた人たちを大熊町の避難所で取材した後、北に向かい、双葉町を移動する途中で避難指示を知った。避難の車で大渋滞する中、日付の替わる頃、原発から北に30キロの南相馬市に抜けた。一方、SNGスタッフは、夜明けとともに生中継するために相馬市に向かい、結果的に、避難指示の出ている原発地帯を本社クルーに後れて縦断した。ポケット線量を保持していなかったが、放射線量が高くなっていたのはまだ原発

直近に限られていたと見られることから、被ばくはほとんどなかったと推測している。とはいえ、無線も通じない中で、指示をした本社も現場も大きな緊張を強いられた一夜だった。そして未明、避難指示が半径10キロに拡大された。

### メディアで唯一撮影した水素爆発

世界を震撼させたあの瞬間の4分前、編集兼チーフカメラマンの箭内太は、1号機からわずかに白い煙が出ているのに気づき、VTRを回した。第一原発の監視カメラの映像はハードディスクで24時間収録していたが、編集に取り掛かりやすいVTRでも同時収録しておくためだ。

ベントが行われるという情報は12日未明から入っていた。箭内はこの白い煙がベントかと気になりながらも、別の編集機に向かった。原発どころではなかったのだ。県内での震災による直接の死者・行方不明者は1800人を超えるが、震災2日目の12日はまだ状況がわからず、朝になって津波現場との中継がなくなり、午後、各地の映像がようやく入って来るようになった。

った、そんな時間帯だった。だから、原発カメラのモニターに貼りついていられる者は誰もいなかった。その時、大きくもない、小さくもない声が流れた。

「煙！」

午後3時36分、ニュースセンターの中の全ての目がモニターに釘づけになった。

左から6号機、5号機、1号機、2号機、3号機、4号機と並ぶうち、5号機と1号機の建屋が大きな白煙に包まれて、見えなかった。



福島第一原発1号機の水素爆発

誰もが息を飲み、声を上げる者はいなかった。白煙は次第に左に、北の方角に流れていく。小さな悲鳴が所々で漏れた。

報道部長の小林典子がすぐさま日本テレビに一報を入れ、デスクの松川修三が東京電力に電話をかけた。すべてのスタッフがカットインに向けて動き始めた。

原発で何が起こったのか、その瞬間を見た者は実はいない。VTRを再生すると、1号機が爆発しているように見えた。しかし、県災害対策本部でも、東京電力でも、何も掴めないどころか、何かが起きていることさえ把握していなかった。

「カットインします」

小林が押し殺した声でローカルカットイン了解を求めてきた。ニュースセンターの中央にあるアナウンサーブースで、ヘルメットをかぶった大橋聡子がその時を待った。

「先ほど、福島第一原発1号機から大きな煙が出ました、大きな煙が出ました。」

3時40分、大橋がしゃべり始めた。声が上がらず、表情が硬い。勿

論、原稿はない。



県内に水素爆発の第一報を伝える大橋アナ

「煙が北に向かって流れているのがわかるでしょうか。」

大橋への指示は、『見たままをしゃべれ、余計なことは言うな』だけだった。何の情報もないままに、

原発を生中継する画面で見えるままを大橋は繰り返すしかなかった。

カットイン約1分後、その瞬間のVTRが間に合った。まるで音が聞こえるように建屋がはじけ、真っ白な煙が大きく広がるのがわかる。誰が見ても『爆発』としか表現のしようがないが、大橋は『爆発』と言うことも禁じられていた。

佐藤にも、原発事故では、水素爆発や水蒸気爆発、その他の燃料

類の爆発の可能性があるという程度の知識はあったから『爆発』と表現することも考えた。しかし、『核爆発』と誤解されることを怖れた。『爆発』と表現することを禁じたのが正しかったのかどうか、今もわからない。

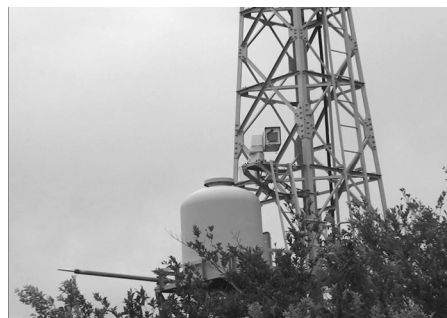
「何でもいから、映像を繰り返して流してくれ！同じことでもいいから繰り返ししゃべれ！」

この周りには何万人もの人がいる。『爆発』とは言わないが、この映像を見て一人でも多くが早く避難してほしい、それだけを願って、カットインは7分55秒続いた。

唯一の情報となった原発監視カメラの映像はどうやって撮影されたか。

カメラは、第一原発から17キロ、第二原発から10キロ離れた山中の送信所にある。お天気カメラとして使われることが多い最大36倍のアナログカメラで、チェルノブイリ事故の後に設置を検討したが実現せず、設置したのは2000年。前年の東海村JCOの臨界事故を受けて、国内でも原子力施設の事故が現実には起きること、起きれば立ち入り制限がかかることを再認

識しての設置だった。県内では、海岸線に構えたNHKに次いで民放で一番早い原発カメラだった。しかし、山の木々と原発しか撮れず、その映像を使ったのは設置10年余りで数えるほどのカメラだった。



水素爆発を撮影した定点カメラ

デジタル放送が始まると、HDCカメラに更新するに当たって、新たに設置場所を求め、09年、両原発から2キロ前後の地点に1台ずつ設置していた。このため当然、アナログカメラの撤去が検討されたが、事故の3か月前に『アナログも当面維持』とした結論があの映像につながった。

一方、至近のはずだったHDCカ

メラは被災し何の役にも立たなかった。

## 水素爆発映像の衝撃

4時49分、大橋が、日本テレビからの呼びかけに応える形で初めて全国に伝えた。

「ご覧いただいているのは、午後3時36分の福島第一原発の映像です」

映像を補完する情報は何もなかったが、全国に衝撃をもって伝わったことだけはわかった。

政府は一時間後の5時46分、『何らかの爆発的事象があった』ことを認め、8時40分を過ぎ、『建屋の水素爆発』と発表した。発生から5時間。ニュースに爆発の映像がなかったら、発表自体いつになったのか。SPEEDIの公表を止めた政府だけに、今も疑問が残っている。

続いて14日午前11時01分に3号機が水素爆発した。爆発の1分後にカットインし、日本テレビから全国へほぼ生中継で伝えた。

## メディア不信とデマ情報の混乱

「国や東電の圧力に負けずに、原発の映像を放送し続けてください」

1号機が水素爆発した翌13日からこんなメールが視聴者から届くようになった。

身に覚えはなかったが、ネットに「外国のテレビ局では水素爆発の映像を流しているのに、日本では国の圧力やスポンサーである東京電力への配慮で、放送されていない」と流れているという。海外で放送されているのは日本テレビから配信許可したものだ。

15日には、「なぜ原発のライブ中継をやめたのですか!」というメールが入った。

15日早朝、4号機で火災があったと発表されたが、この時は海沿いに霧がかかり、何も撮影できなかった。それを受けてのメールだった。

ネットで検索すると、数多くのデマが流され、それを見た人たちが右往左往しているのがわかった。外国のニュース映像としてアップされた動画には凄まじい爆発音まで付けられていた。私たちのカメラは17キロ離れていて、音声は収

録していない。なのに、爆発と同時に轟音が上がるこの映像が世界で真実と信じられているのか、怒りの一方で力が抜けていくのを感じた。

この新しいメディアの問題は視聴者だけの問題ではなかった。社内でも、特に若いスタッフたちが個人的に原発事故に関する情報を探していた。そして新しい情報、特に危険性を強く訴えるサイトを見つけると、互いにその情報を教えあい、URLを送信し共有した。

年代にもよる利用メディアツールと情報の違い、反応の早さと広がり。16年前の阪神淡路大震災ではなかっただろう難しさを痛感した。

## 取材の自主規制、最悪事態の想定

15日、それまで海側に吹いていた風が内陸への風に変わり、福島市では、午後6時すぎに通常の500倍の放射線を計測した。

FCIでは、原子力事故の際の取材範囲を『原子力施設から半径30キロの外』と定めていたが、取材エリアを第一原発から40キロま

で下げる決断せざるをえなかった。



集団避難をする飯館村民

40キロに規制しても勿論、必要最小限の取材は続けた。中には村に残った酪農家の取材を事後報告で続けた記者もいて、規制は8日後に解除したが、禍根が残った。

40キロ以内から入る情報は「L字情報」として24時間流し続けた。写真館、生花店の再開情報まで載せ、5月連休明けまで続けた。県民を見捨てたという負い目がそうさせたと思う。

最悪の事態も想定しなければならなかった。本社のある郡山市や県庁・県災害対策本部のある福島市が屋内待機指示または避難指示のエリアになったら、どうやって

取材を続け、県内そして全国に向けて放送を続けるか。  
 まとめた案はいわば「竈城組」がどうニュースを出し続けるかを検討したものの、フエーズ3(屋内待機)もフエーズ4(全員避難)も幸い実行の時を迎えることはなかった



ニュースセンターでの取材打合せ

## 視聴者に応えられないテレビ局

放射線計測値は15日をピークに下がったが、下がり方は鈍く、また新たな課題を抱えた。  
 「本当に避難しなくて大丈夫なの？子供たちも大丈夫なのか？」など、避難指示のない地域

の視聴者からメールが次々に寄せられるようになった。答えようがなかった。県災害対策本部で発表される事故の状況や数値、官房長官や原子力安全保安院の会見をそのまま伝えるしかなかった。

専門家と言われる人たちの意見も極端に違った。原発の状態や放射能汚染について、危険と感じている人は危険だとする情報をさらに集め、避難するまでの必要はないと考える人は大丈夫だとする情報を採したように思う。誰もが自分を正当化しなければ耐えられなかった。

ひとつのニュースに対して、放送直後に視聴者から『テレビ局が不安を煽るのか』という声と『子どもが将来病気になったら責任を取れるのか』という声が同時に届くことも度々だった。

## 視聴者からの声で一步踏み出した

方々のニュース情報番組のスタジオがゴールデンウィーク明けに復旧した。

「放射線に関するみなさんの思いやご意見をお寄せください」メールとファックスが溢れるよ

うに届いた。子供の健康不安、避難生活の辛さ、頑張る決意、事故の収束をひたすら願う声……。勿論、悲鳴や報道への不信感もあったが、私たちは、抛って立つべき場所を視聴者からもらったと思った。



街に出て放射線を測る須賀アナ

4月下旬から増えてきたのが、

「窓を開けてもいいのか」とか「半そでを着ても外を歩いても大丈夫なの？」という声だった。役所の敷地で測った放射線量ではなく、身近なところで採ったデータを見てもらい、日常生活に役立ててもらおうと、『身近な放射線測定』企画を始めた。

雨水が集まる所は高い、草むらも高い、窓を長時間開けていても

室内の線量は変わらない等々、線量が低い場所でも大げさに反応せず淡々と伝えた。抗議が殺到することを覚悟していたが、「役に立った」わがかりやすかった」という声

が次々に寄せられた。  
 お母さんたちから最も多かったのが「子どもの年間被ばく線量も20ミリシーベルトというのは絶対納得できない」という声だった。当然だ、平常時の被ばく許容線量が1ミリだというのに。福島県の母親たちの生の声を直接伝えようと、文部科学大臣にスタジオ出演を依頼した。大臣ではなかったが、高官の生出演が実現した。文科省はその後、20ミリシーベルトは撤回しなかったが、限りなく1ミリシーベルトを目指す」と表明した。

## これから福島県のメディアとして

原発事故の後、警戒区域を含めて合わせて16万人近くが避難し、うち6万人近くは県外で避難生活が続いている。事故から2年が経つが、この人数はほとんど変わらない。ただ、逆から見れば190万人以上が福島県に住み続けている。これまでの知見に照らせば、

警戒区域以外では、空間放射線量はまったく健康に影響を及ぼす値ではないし、農産物や水産物の検査と基準値も、内部被ばくを避けるために厳しく適用されている。しかし、福島は、遠ざけられたまま固定されているように思う。



郡山駅前のリアルタイム線量計

福島に住む人たちの復興は、これまでの人生を否定されたような悔しさと無力感からどう立ち直るのか、心の復興から始まる。しかし、避難、帰還の見通し、家族、子どもの健康、放射線の危険性の捉え方、仕事、賠償等々、個人個人の抱える事情や環境が全く異なるために、時間とともに困難は複雑化している。

その一方、劇的な変化が少なく

なり、次第に全国ニュースになりづらくなっている。地元メディアとして風化に抗うと言いながら、これからも困難さは増すばかりのようと思う。

### 《資料提供》FCT福島中央テレビ

### 関東民放クラブ無線同好会

〓全国民放OBのハム仲間へ向け  
試験運用開始〓

秋田 完(TX)

関東民放クラブ無線同好会は、昨年から関東エリアでUHF帯によるローコールを月2回開始してきましたが、この電波では同じブロックの静岡、長野、新潟などの仲間との交信は出来ません。



全国民放OBのハム仲間とより広く交流し、親睦を深めたいということもあって、短波帯を利用しQSOの試験運用を行ってみようという話がアイボールミーティングの席上で出て来ました。



民放クラブは各地区ブロックで活動をしています。同好会の中では複数の地域の仲間と合同で楽しんでいる事例が多くみられます。全日本で同時に交流出来るのは電波だからこそです。

但し、電波でも周波数帯や時刻などでは繋がらないことも少なくありません。

そこで、平成25年4月13日(土)を一回目として、以後毎月第二土曜日のいずれも午後3時から4時までの1時間、

周波数7・065MHz付近を使用しラウンドQSO形式で交信を行いたいと思います。

ネットコントロールは

J A 1 P X の秋田 完(TX)、サポートを

J A 1 B Q K 加藤 卓(TBS) J H 1 E U C 森 紘一(NTV)がいたします。

また、関東民放クラブ無線同好会の会員も参加致します。

7MHzにオンエア出来る方は、是非チェックインをお願いしたいと思います。

試験運用で成果が上がれば、エリアを超えた会員間の交流を図り、アマチュア無線を活用した全国的なネットワークを構築し、非常災害時など、社会活動の一環として役立てればと思っています。是非ご参加下さいますようお願い申し上げます。

問い合わせ先

秋田 完

03(3411)3677

加藤 卓

0424(61)2277

森 紘一

03(3362)0644